糸井古墓群発掘調査報告

——県営圃場整備事業糸井地区に係る
埋蔵文化財の発掘調査——

1984

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

目　　次

Ⅰ はじめに …… 1

Ⅱ 位置と環境 …… 2

Ⅲ 調査の概要 …… 4

Ⅳ 遺構と遺物 …… 6

Ⅴ まとめ …… 23

例　　言

1．本報告は，昭和58年10～12月に実施した県営圃場整備事業糸井地区に係る糸井古墓群（糸井第３～６号古墓）（広島県三次市糸井町所在）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は広島県三次農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．本書は梅本健治が執筆・編集した。

4．遺構の実測・写真撮影は三枝健二・妹尾周三・山田繁樹・梅本が，遺物の実測・写真撮影及び実測図のトレースは梅本・古瀬裕子が行なった。

5．図版８の遺物番号は第20～23図の遺物番号と同一である。

6．第１図は，建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図（三次）を使用したものである。

挿 図 目 次

第１図　糸井古墓群周辺遺跡分布図…… 3
第２図　糸井古墓群周辺地形図　…… 5
第３図　糸井第３号古墓トレンチ配置図… 6
第４図　糸井第４号古墓地形測量図…… 6
第５図　糸井第４号古墓積石部実測図……　折込
第６図　糸井第４号古墓列石見通し実測図… 7
第７図　糸井第４号古墓断面図　…… 8
第８図　糸井第４号古墓土塁状積石部実測図　……折込
第９図　糸井第４号古墓出土土器実測図…10
第10図　糸井第４号古墓出土鉄器実測図…10
第11図　糸井第５号古墓地形測量図……11
第12図　糸井第５号古墓断面図　……11
第13図　糸井第５号古墓出土土器実測図…12
第14図　糸井第５号古墓出土石器実測図…12
第15図　糸井第６号古墓地形測量図……13
第16図　糸井第６号古墓断面図　……13
第17図　糸井第６号古墓土壙墓配置図……14
第18図　糸井第６号古墓土壙墓実測図(1)…15
第19図　糸井第６号古墓土壙墓実測図(2)…16
第20図　糸井第６号古墓出土鉄器実測図(1)……19
第21図　糸井第６号古墓出土鉄器実測図(2)……20
第22図　糸井第６号古墓出土古銭拓影・実測図　……21
第23図　糸井第６号古墓出土土器実測図…21

図 版 目 次

図版１ａ　糸井第４号古墓全景（調査前，南東より）
　　ｂ　糸井第４号古墓積石部（南東より）
図版２ａ　糸井第４号古墓積石部・南西辺墳裾列石（南西より）
　　ｂ　糸井第４号古墓北西－南東断面（北東より）
図版３ａ　糸井第４号古墓土塁状積石部（北西より）
　　ｂ　糸井第４号古墓土塁状積石部中央凹部全景（南西より）
図版４ａ　糸井第５号古墓全景（調査前，東より）
　　ｂ　糸井第４号古墓・第５号古墓出土遺物
図版５ａ　糸井第６号古墓全景（調査前，東より）
　　ｂ　糸井第６号古墓土壙墓群全景（西より）
図版６　糸井第６号古墓土壙墓（１）
図版７　糸井第６号古墓土壙墓（２）
図版８　糸井第６号古墓出土遺物

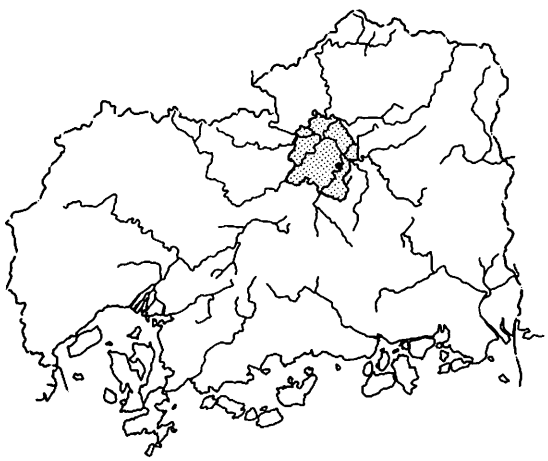
Ⅰ．はじめに

本発掘調査は，広島県三次市糸井町における県営圃場整備事業糸井地区に係るものである。

昭和55年10月，広島県三次農林事務所（以下「三次農林」）より，広島県教育委員会（以下「県教委」）宛に，県営圃場整備事業糸井地区予定地内の埋蔵文化財の有無並びに取扱いについて照会があった。これを受けて，県教委は直ちに分布調査を実施して，13遺跡を確認し，同年12月，三次農林にその旨を回答した。その後，協議を重ねたが，糸井古墓群については地区外にした第１号古墓を除いて現状保存が困難であるため，昭和58年３月，三次農林より県教委に糸井第２号古墓～第６号古墓の５遺跡についての発掘調査の依頼があった。

発掘調査は，文化庁と農林省の覚え書き「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調査について」のⅠの（５）項に基き，農政部負担分（80％）については財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」）が，農家負担分（20％）については広島県立埋蔵文化財センター（以下「県立センター」）が調査を担当することとなり，財団センターは古墓群中の第３～６号古墓を，県立センターは第２号古墓の発掘調査を行うことになり，財団センターは三次農林との間で委託契約を締結し，昭和58年10月３日～12月９日の約２ヶ月間，調査を実施した。調査面積は420㎡である。

なお調査にあたっては県立センター，三次市教育委員会，広島県三次農林事務所，三次市田幸公民館，三次市糸井コミュニティホーム及び三次市糸井町，大田幸町上谷・上定・信貞地区の方々には多大なる協力を得た。記して謝意を表する。



三次市位置図　黒丸は糸井古墓群

Ⅱ. 位置と環境

三次市糸井町は広島県北部の中枢三次市の東端に位置し，市街地の東南方約7.5kmの距離にある。市域東半部を東から西に流れて，市街地付近で江の川に合流する馬洗川の南岸には標高200～300mの低位丘陵がひろがり，糸井町はこの低位丘陵地帯を南から北に貫流して馬洗川に注ぐ美波羅（みはら）川下流の西岸に形成された，狭小な盆地状の沖積低地とこれをとりまく低位丘陵とからなる。馬洗川南岸の低位丘陵地帯には数多くの古墳・古墳群をはじめとする県内でも有数の遺跡密集地域であるが，以下においては糸井古墓群の周辺，すなわち美波羅川下流域を中心に時代毎に概観して行きたい。

旧石器時代　西酒屋町下本谷（しもほんたに）遺跡[1]・四拾貫町下山遺跡群[2]で該期の調査が行なわれ，三次盆地周辺の低位丘陵地帯での旧石器の単独出土・表採例も比較的顕著であり，当地域は広島県内での該期遺跡が最も多く発見されている地域である。

縄文時代　該期については遺跡数が少なく，その内容についても余り明らかでないが，その中にあって，東酒屋町松ヶ迫B地点遺跡[3]で検出された縄文早期の竪穴式住居跡は注目される。

弥生時代　大田幸町塩町遺跡[4]は，美波羅川下流右岸の丘陵上に位置する集落跡で，弥生中期後半を中心とした平面円形の竪穴式住居跡10数軒を検出した。また，三若町陣床山遺跡群[5]では弥生中期後半の土壙墓11基が検出されている。一方，十日市町花園遺跡[6]・東酒屋町矢谷古墳[7]は，弥生期の墳墓から古墳への過渡的な墳墓形態として，古墳発生を解明する貴重な調査例である。

古墳時代　前半期の古墳として，高杉町浄楽寺古墳群・小田幸町七ツ塚古墳群・糸井町糸井大塚古墳・大田幸町畑原開山9号墳[8]などがある。浄楽寺・七ツ塚古墳群は計172基からなる，県内でも最大規模の古墳群であるが，主墳とみられる第1号古墳は径42mの円墳で2基の粘土槨を埋葬主体とする。糸井大塚古墳は糸井古墓群の西方に近接しており，全長65mの帆立貝式古墳である。畑原開山9号墳は箱式石棺を内部主体とする円墳で，内行花文鏡・琴柱形石製品が出土している。また，後半期の様相については余り明らかでないが，東酒屋町松ヶ迫古墳群・同天狗松古墳群・粟屋町若屋第9号古墳などが横穴式石室を内部主体としている。また，該期の集落跡としては，6世紀後半代の竪穴式住居跡7軒を検出した，大田幸町重岡山遺跡[9]がある。

古代　当該地域は律令体制下の備後国三谿（みたに）郡に属す。馬洗川北岸の丘陵縁辺には奈良時代創建の寺町廃寺[10]・上山手廃寺[11]がある。特に，前者は『日本霊異記』記載の三谷寺に比定されている。

また，三谿郡衙に推定される志幸町幸利遺跡からも古瓦が確認されている。

中世　特に中世後半には，美波羅川沿岸から美波羅川・国兼川が馬洗川に合流するあたりにかけては，三若町旗返山（はたがえしやま）城に本拠を置く江田氏の勢力範囲であり，同氏に関連した山城跡が多い。特に，毛利氏と江田氏の抗争の舞台となったと考えられる糸井町の周辺には，天文23（1554）年の江田氏滅亡に関わる，糸井町笠城山城跡・志幸町新宮山城跡・高杉町高杉城跡などがある。一方，古墓としては糸井町馬場古墓・三良坂町寄国中世墳墓などがある。

(註)

(1) 広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』昭和55年(1980)年，他。

(2) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『下山遺跡群発掘調査報告』昭和55(1980)年

(3) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』昭和56(1981)年

(4) 松崎寿和「古代農村の復元」『大学人会研究論集（広島の農村)』第2集　昭和30(1955)年

(5) 陣床山遺跡発掘調査団『陣床山遺跡群の発掘調査』昭和48(1973)年

(6) 三次市教育委員会『史跡　花園遺跡ー調査と整備ー』昭和54(1979)年

三次市教育委員会『史跡　花園遺跡ー第2次調査と整備ー』昭和55(1980)年

(7) (3)に同じ

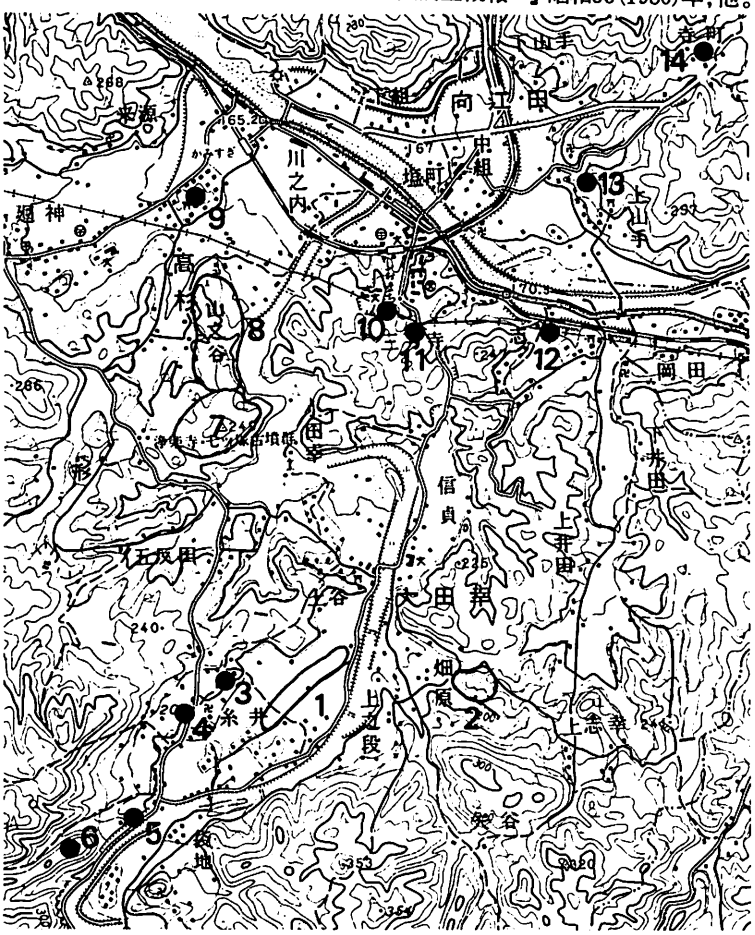
(8) 本村豪章「備後三次市畑原開山9号墳」『古代吉備』第5集　昭和38(1963)年

(9) 重岡山遺跡発掘調査団『重岡山遺跡発掘調査報告』昭和55(1980)年

(10) 三次市教育委員会『備後寺町廃寺ー推定三谷寺跡第1次発掘調査概報ー』昭和55(1980)年，他。

(11) 広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報(1)』昭和54(1980)年，他。

1．糸井古墓群
2．畑原開山古墳群
3．糸井大塚古墳
4．馬場古墓
5．館跡
6．笠城山城跡
7．七ッ塚古墳群
8．浄楽寺古墳群
9．高杉城跡
10．塩町遺跡
11．重岡山遺跡
12．新宮山城跡
13．上山手廃寺
14．寺町廃寺



第1図　糸井古墓群周辺遺跡分布図（1：50,000）

Ⅲ. 調 査 の 概 要

糸井古墓群は，広島県三次市糸井町に所在する中～近世の古墓群で，計６基の古墓で構成される。

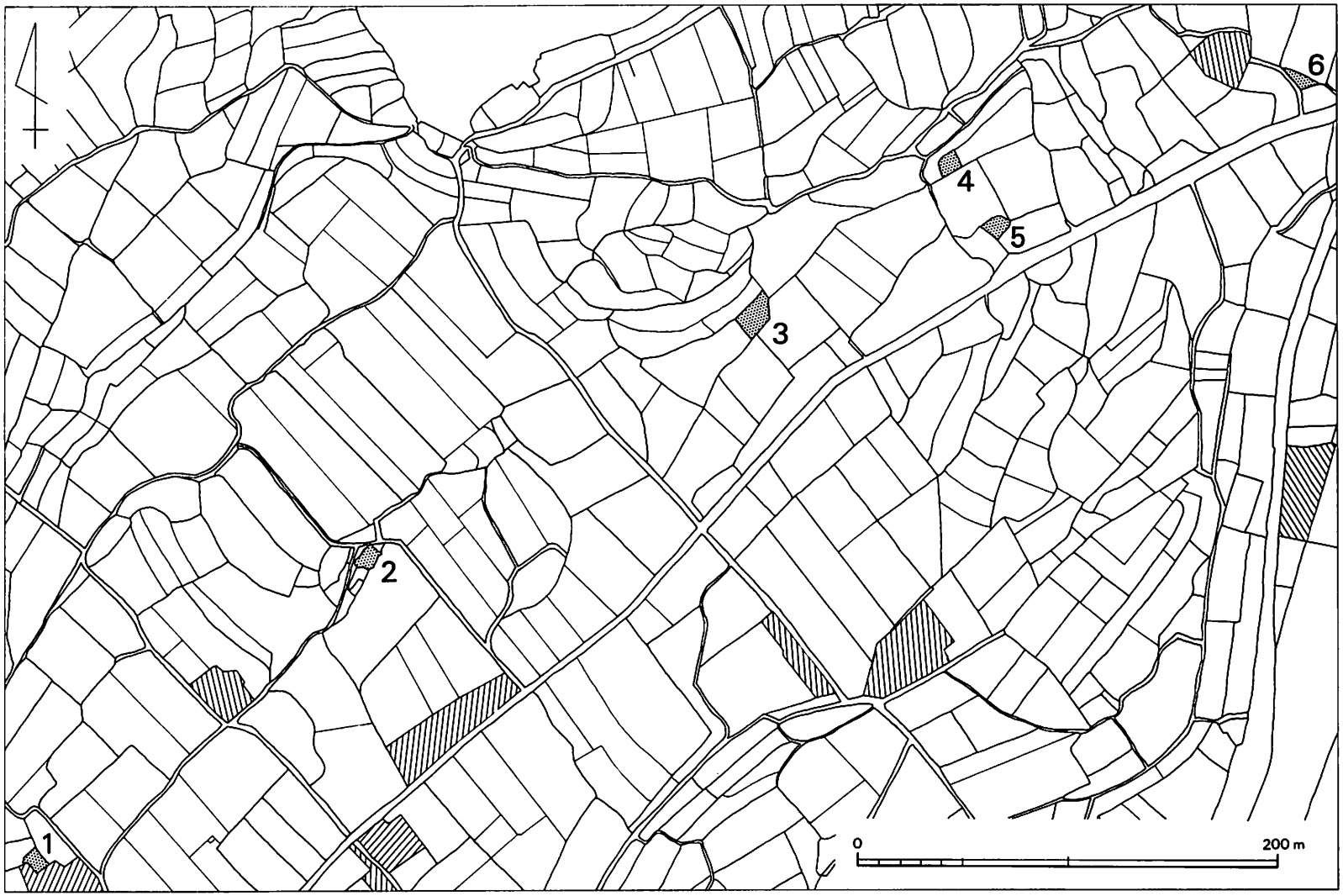
古墓群は，北流する美波羅川下流の左岸にひらけた盆地状の沖積低地である標高180ｍ台の水田地帯に在る。美波羅川の流れにほぼ平行して，南西から北東方向に100～200ｍの間隔をあけて，計６基の古墓が点在している。今回調査を実施したのは，糸井古墓群の北東側の計４基の古墓である（糸井第３～６号古墓)。以下，古墓毎に調査の概要を述べよう。

（１）糸井第３号古墓……調査面積98㎡。墳丘等上部構造はすでに削平されており，基底面・内部主体も検出しえなかった。

（２）糸井第４号古墓……調査面積104㎡。今回，調査対象になった古墓のうち，最も保存状況の良かった古墓である。調査の結果，11.5×8.5ｍ，高さ2.2～2.5ｍの平面隅丸長方形の積石塚で，南隅に突出部をもち，南西辺の墳裾には角礫を用いた列石がみられる。墳頂下70㎝の黒褐色土層上面で炭集中部５ヶ所を検出した。さらに，その下位で埋葬施設と考えられる土塁状積石部を検出した。この土塁状積石部の中央凹部には３ヶ所の埋葬空間が存在し，この空間に複数の埋葬を行なったと考えられた。

（３）糸井第５号古墓……調査面積70㎡。８×6.8ｍ，高さ1.3ｍの積石塚と，その西方の1.2×3.9ｍ，高さ0.7ｍの小礫塊とからなる。何ら内部主体等を検出できなかったが，小礫塊に伴って少量の土師質土器等が出土した。

（４）糸井第６号古墓……調査面積142㎡。17.5×７ｍ，高さ１ｍの平面三角形の墳丘をもち，墳丘下で近世の土壙墓11基を検出した。土壙墓は平面隅丸方形，上面規模一辺100～154㎝，深さ25～81.5㎝で，いずれの土壙墓からも人骨片と鉄釘が出土した。

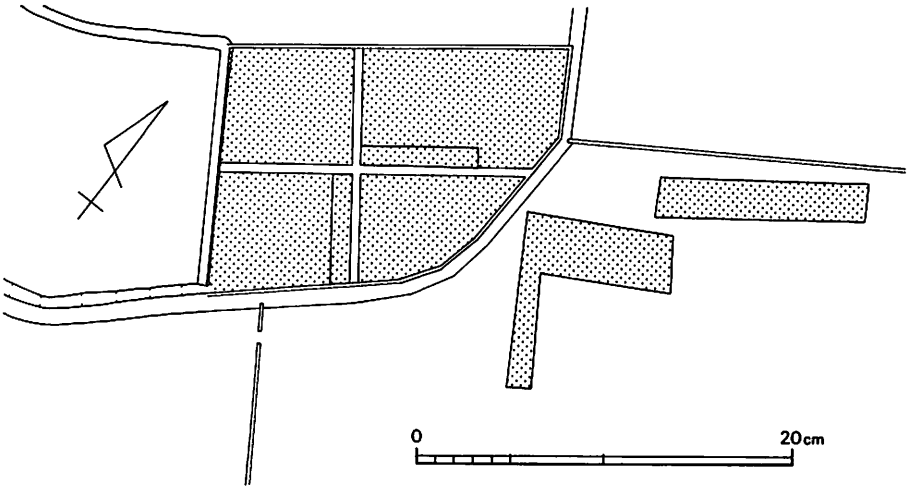


第2図　糸井古墓群周辺地形図（1：3,000）1～6は古墓の番号を示す（アミ目：古墓）

Ⅳ. 遺構と遺物

1　糸井第３号古墓（第３図）

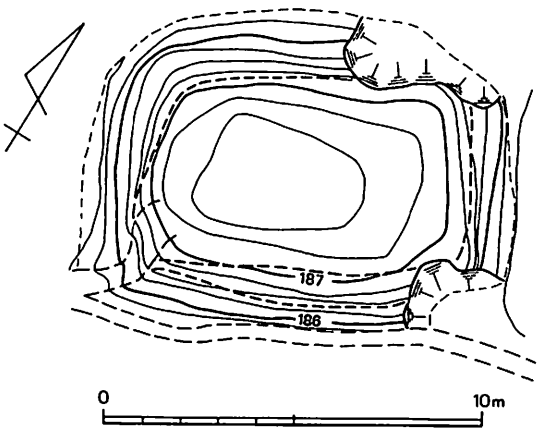
第３号古墓は三次市糸井町1834，1826番地に所在する。第２号古墓と第４号古墓のほぼ中間に位置し，第２号古墓の北東約210ｍの距離にある。現状は水田と化しており，墳丘等古墓の上部構造は何らとどめていなかったため，1834の水田は土層観察用の畦（幅50cm）を十字に残して全面的に，また1826の水田には計３本のトレンチを設定して，耕作土・床土を除去して，古墓の基底面・内部主体の検出に努めたが，床土の下位は自然堆積層（砂・砂礫層）で，何ら古墓に関連した遺構は検出しえなかった。



第３図　糸井第３号古墓トレンチ配置図（１：400）アミ目は調査区

2　糸井第４号古墓（第４図，図版１ａ）

現状と規模　第４号古墓は第３号古墓と第６号古墓のほぼ中間に位置し，第３号古墓の北東約120ｍの距離にある。標高185ｍ強の水田地帯の中央にあり，古墓の南東辺を南西ー北東方向に畦道が走り，残りの三方は墳裾まで水田がせまっている。南東辺・北西辺及び東隅・北隅・西隅の各コーナー部分は水田耕作や畦道により削平をうけている。現状の規模は，北東ー南西方向11.5ｍ



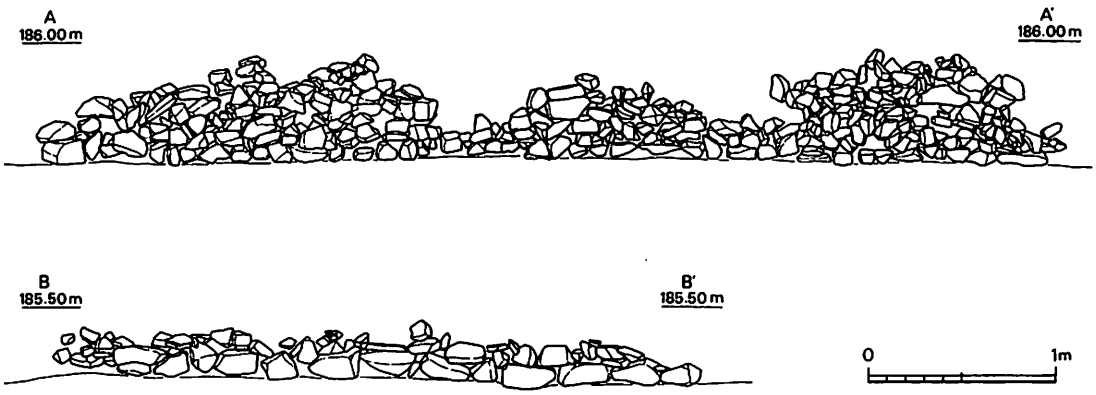
第４図　糸井第４号古墓地形測量図（１：200）

第5図　糸井第4号古墓積石部実測図（1：60）

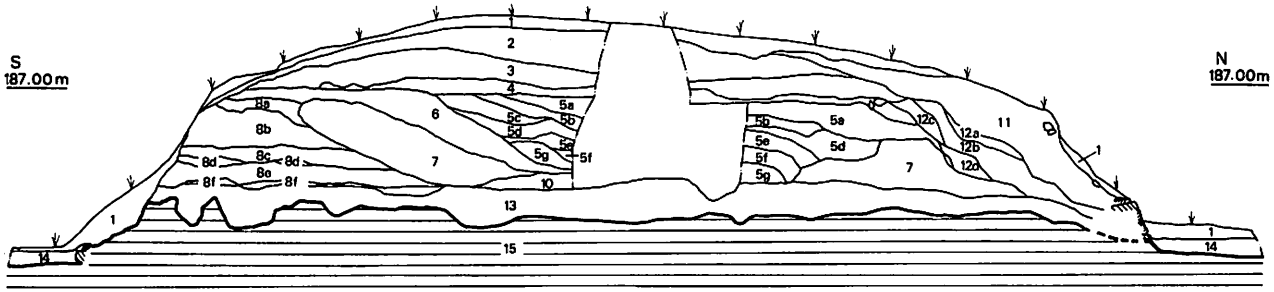
×北西－南東方向8.5m，高さは南西辺墳裾から2.5m，北東辺墳裾から2.2mをはかる。古墓の平面形は南隅が突出する隅丸長方形を呈しているが，旧状はほぼ長方形を呈していたものと思われる。墳頂部は最高所（標高187.756m）が南西辺にかなり偏っているため，南西から北東方向になだらかに下傾する平坦面をなす。古墓の主軸方位はN61°Eである。

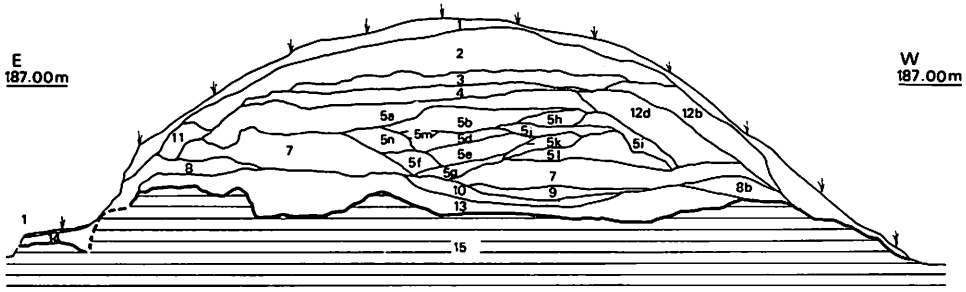
古墓の構造（第7図，図版2b）　先ず，表土（暗褐色土）を10cmばかり掘りさげると，10cm大のものを主として5～20cm大の亜角礫を乱雑に積みあげた状態の積石部（第5図，図版1b）を検出した。この積石部は礫間にかなり多くの暗褐色土を含む混土礫層である。積石部を50cm弱掘りさげると，砂礫層の状況に近い暗黄褐色土層に到り，その下位は礫をほとんど含まず軟質の暗灰色土層である。この暗灰色土層中には一定量の木炭及び白色の微細粒を含む。暗灰色土層の下位には黒褐色土層（5a，6層など）があり，この黒褐色土層上面で大小5ヶ所の炭の集中部を検出した。これらの炭集中部は，最小のもので径30cmの円形を呈し，最大のものは一辺50cmの不整方形をなしており，炭の堆積の厚さは最大3cm程度である。周囲の土が焼けた痕跡はみられないが，炭集中部の中央に淡黄褐色の軟質の粘土が存在する例がみられる。よって，これら炭集中部については不明な点が多いが，少くともこの地点で火を使用したものではなく，炭そのものを何らかの理由により運びこんだものと考える方が妥当であろう。炭集中部の周辺からは，陶磁器片2・須恵質土器片1・土師質土器片2・瓦質土器片1・鉄刀子1（第10図1）が出土しているが，土器片についてはいずれも細片で図示しえなかった。

黒褐色土を掘りさげて行くと，中央に方形の凹部をもつ不整長方形の土塁状積石部（第8図，図版3a・3b）を検出した。現状規模は，北東－南西方向10m×北西－南東方向8m，高さは南西辺墳裾から南西辺頂部までが1.8m，同じく中央凹部から南西辺頂部までが0.8mをはかる。また，北東辺墳裾から北東辺頂部までが1.2m，同じく中央凹部から北東辺頂部までは0.45mをはかる。つまり，南西辺の頂部が最も高く，ここから北東辺頂部にむかって下傾している状態を示す。中央凹部は，一辺2.5mの正方形の北隅に一辺1mの突出した空間がみられ，



第6図　糸井第4号古墓列石見通し実測図（1：40）





（土層説明）

1．暗褐色土（表土）
2．暗褐色土（積石部）
3．暗黄褐色土
4．暗灰色土
5 a 黒褐色土
b 暗褐色土
c 褐色土
d 褐色土
e 暗褐色土
f 黒褐色土
g 暗黄褐色砂質土
h 暗褐色砂質土
i 褐色土
j 暗黄褐色粗砂
k 黒褐色土
l 黒色土
m 黒色土
n 暗褐色土
6．黒褐色土
7．礫（土塁状積石部）
8 a．c．e 黒褐色土
b．d．f 暗褐色土
d 褐色土
9．黒褐色土
10．暗茶褐色土
11．混暗灰色土礫
12 a 褐色土
b 褐色土
c 褐色土
d 褐色土
13．混黒褐色土礫
14．灰黒色土
15．黄褐色砂礫

0　5m

第7図　糸井第4号古墓断面図（1：80）

第8図　糸井第4号古墳土壇状積石部実測図（1：60）

また北西辺のほぼ中央から高さ約30cmの積石部が半島状に南東辺にむかって長さ２ｍほどのびており，この中央凹部を北東側と南西側に区画している。さらに北東側の空間は北隅部と東隅部に分けることができよう。これら３ヶ所の空間の広さを大まかに示せば，南西部の空間が１×2.5ｍ（面積2.5㎡）北隅部の空間が１×１～1.4ｍ（面積１～1.4㎡），東隅部の空間が0.8×1.6ｍ（面積1.28㎡）となる。この土塁状積石部に直接伴う遺物は，不明鉄器２，鉄釘１のみであり，土塁状積石部の性格・時期など明確にしえないが，中央凹部の南西部空間の底面から鉄釘が出土していることから，可能性として中央凹部の３つの空間を埋葬空間とする埋葬施設と考えることができないだろうか。

古墓の構築状況　次に，本古墓の構築状況を述べると以下のようになろう。すなわち，①地山（砂礫層，15層）の周辺を削り落して長方形の基壇をつくる。②混黒褐色土礫をこの基壇上に敷きつめる。③黒褐色土と暗褐色土を交互に敷きつめて，南西辺を中心に北東辺側が開く馬蹄形の基礎を築く。④③の内側斜面に50cm程度の厚さに亜角礫を積み，中央に３個所の空間をもつ土塁状積石部を構築する。⑤この土塁状積石部の上に黒褐色土系の土を盛土し，平坦な墳頂部を形成する。⑥この墳頂で何らかの理由で炭の堆積が行なわれる。⑦炭集中部をおおうように暗黄褐色土（３層），暗褐色土（２層）を盛土し，古墓の構築を終了する。

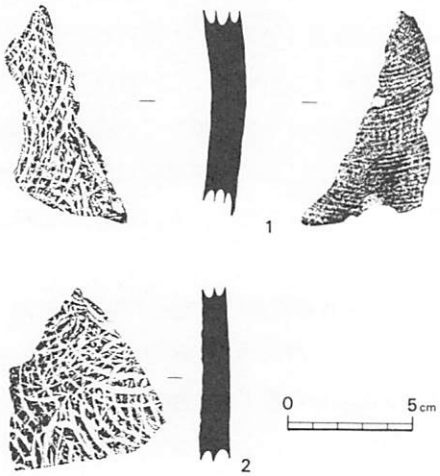
列石（第６図，図版２ａ）　本古墓の南西辺墳裾・北東辺墳裾には各々列石がみられる。北東辺の列石については，床土（14層）の上位に石垣状に築かれており，恐らく後世の水田耕作時の土留めのためのものと思われる。また，南西辺の列石については，地山の周囲を長方形に削りおとして造られた基壇の斜面に角礫を並べており，本古墓の構築時のものと考えられる。この南西辺の列石については，最下段に30×10cm程度の比較的大きな角礫を横長に用い，その上に10～20cm大のやや小形の角礫を主として横長に１～２段程度積んでいる。この列石は墳丘の西隅部が削平をうけているために，その東半部分の3.4ｍの長さしか残存していない。ただ注目すべきことは，列石の南東端部の最下段の角礫２個が南方向にカーブを描いていることである。本古墓の南隅部の端部及び南東辺が後世の削平をうけており，この南隅部の旧状を明らかにすることはできないが，列石の南東端部の角礫が描いているカーブから，本古墓の南隅部に突出部が存在したことが考えられる。

遺物（第９・10図，図版４ｂ）　第９図１・２はいずれも土塁状積石部の土壇状の基礎（８層）内部より出土したもので，須恵器甕の胴部片と考えられる。１は内面同心円叩き目，外面カキ目を施している。２は内面同心円叩き目，外面格子目叩き目ののち横ナデを施している。第10図はいずれも鉄器で，１は暗灰色土層直下の炭集中部に伴うもので，２・３は土塁状積石部に伴う。１は鉄刀子で茎の端部及び関の部分を欠失している。現存長6.9cm，刃部長5.5cm，刃部幅最大2.4cm，棟厚５mm，茎の現存長1.4cm，茎幅0.９～１cm，茎の厚さ3.5mm，刃は片刃と考えられる。２は，土塁状積石部南西辺側の頂部付近で出土した不明鉄器である。最大長3.7cm，最大幅3.4cm，最大厚0.7cmである。３は，土塁状積石部の中央凹部（南西部空間）の底面より

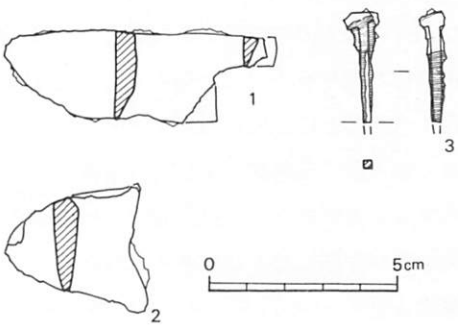
出土した鉄釘で，下端部を欠失している。現存長3㎝。釘頭は長方形（7×6㎜）で，釘身の断面は方形を呈す。釘頭は，L字状に折り曲げた折頭形である。釘身全体に木質が付着している。釘身上半と下半とでは付着している木質の木目の方向が異なり，ほぼ直交している。このことより，この鉄釘が少くとも2枚の板材を貫通しており，それら2枚の板材は互いの木目が直交するような合わせ方がされていたこと，さらには2枚の板材のうち外板の厚さが6～8㎜程度のうすいものであった事実を指摘することができる。

小結　最後に簡単にまとめを行ない，第4号古墓の性格及び時期を考えておきたい。

本古墓は，本来少くとも南隅部に突出部をもつ，平面長方形を呈していたと考えられる。そして，少くとも南西辺墳裾には列石が設けられていた。墳頂下約80㎝の黒褐色土上面で5ヶ所の炭集中部を検出したが，これは黒褐色土層上面での火の使用を示すものでなく，むしろ他所から炭・木炭等が運びこまれ散布された状況を示すと考えられる。この黒褐色土層下に土塁状積石部が存在した。この土塁状積石部の中央には方形の凹部が存在し，計3ヶ所の空間に区画されている。この中央凹部の3ヶ所の空間は，鉄釘1が出土したのみで余り明確なことは言えないが，消極的ながら一種の埋葬空間として捉えておきたい。つまり，中央凹部に複数の埋葬主体（木棺状の）を置いた埋葬施設として捉えたい。なお，第4号古墓の築造された時期については，出土した遺物が少量のため明確にしがたいが，黒褐色土層上面で出土した陶磁器類からごくおおまかに中世末～近世と考えられる。



第9図　糸井第4号古墓出土土器実測図（1：3）



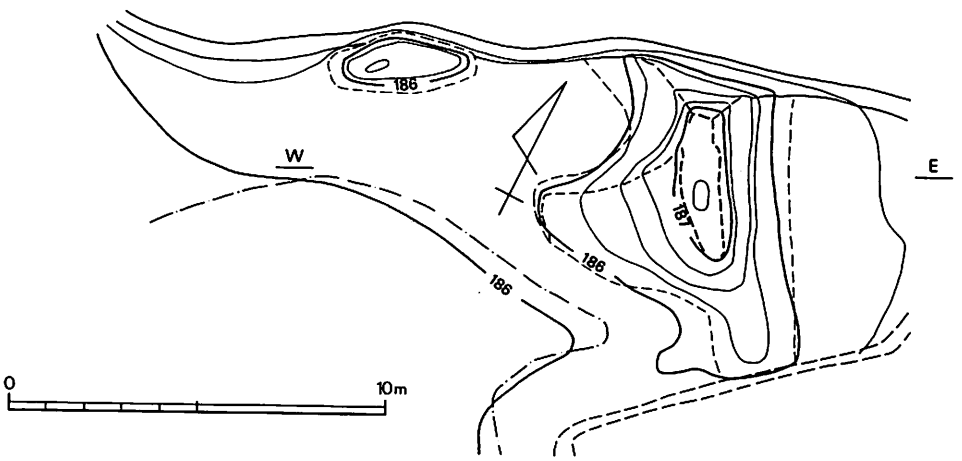
第10図　糸井第4号古墓出土鉄器実測図（1：2）

3　第５号古墓（第11図，図版４ａ）

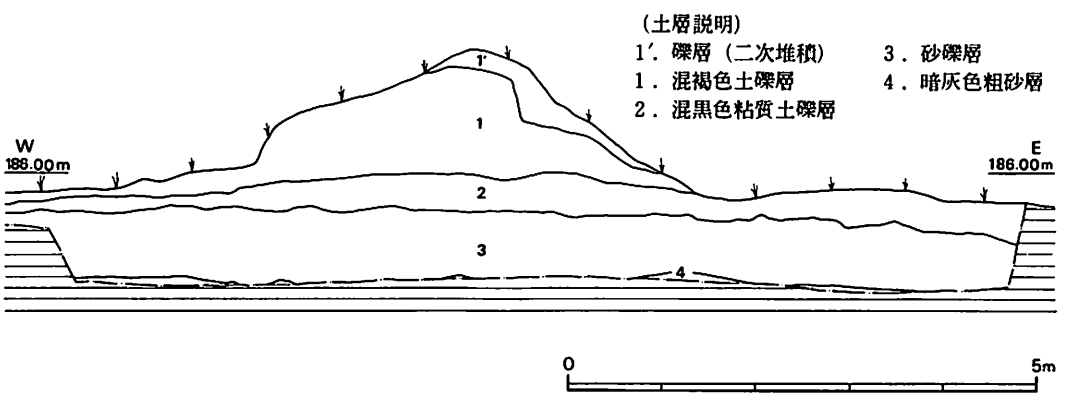
第５号古墓は糸井町84に所在する。第４号古墓の南東30ｍの位置にある。標高186ｍの畑地の北東端にあり，古墓の北辺から南東辺にかけて水田がせまっている。

現状は畑地の一角に南北８ｍ×東西6.8ｍ，高さ1.3ｍの積石塚と，この西方３ｍの位置にある南北1.2ｍ×東西3.9ｍ，高さ約70㎝の小礫塊とからなるが，もとは両者はつながっていたものと思われる。積石塚は，周囲から削平を顕著にうけており，さらにその東斜面を中心に二次的な礫の堆積がみられることより，後世耕作時に露れた礫を投げあげているものと思われる。このように，第５号古墓は畑・水田耕作による削平・再堆積を顕著にうけており，旧状は殆んどとどめていないと考えられる。

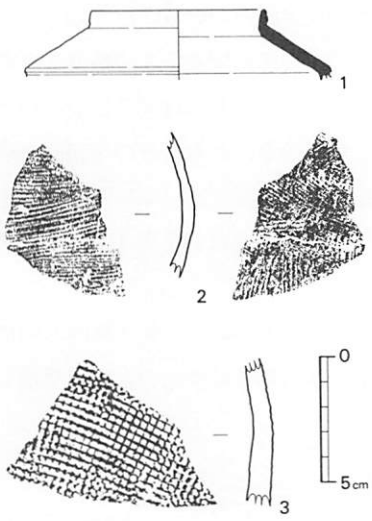
調査方法としては，本古墓の本来の墳丘・築成面を捉えるために，先ず東西方向に幅80㎝のトレンチを入れ，土層観察をこころみた。その結果，本古墓は砂礫層の上位に堆積した混黒色



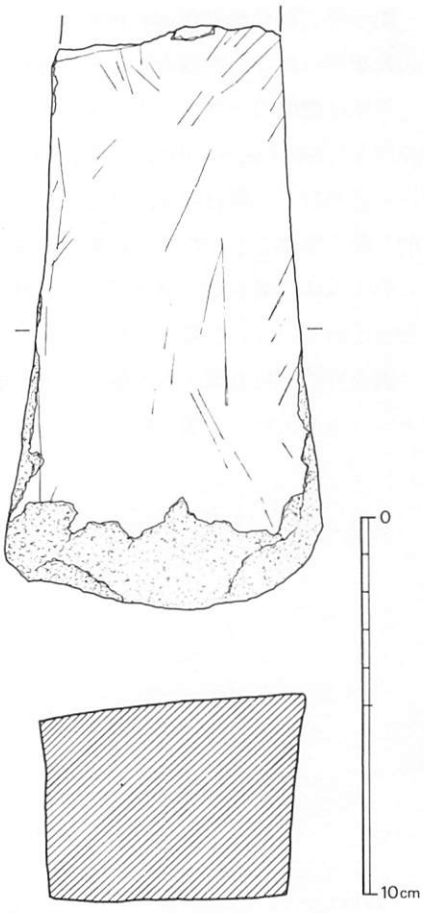
第11図　糸井第５号古墓地形測量図（１：200）



第12図　糸井第５号古墓断面図（１：80）



第13図　糸井第５号古墓出土土器実測図（１：３）



第14図　糸井第５号古墓出土石器実測図（１：２）

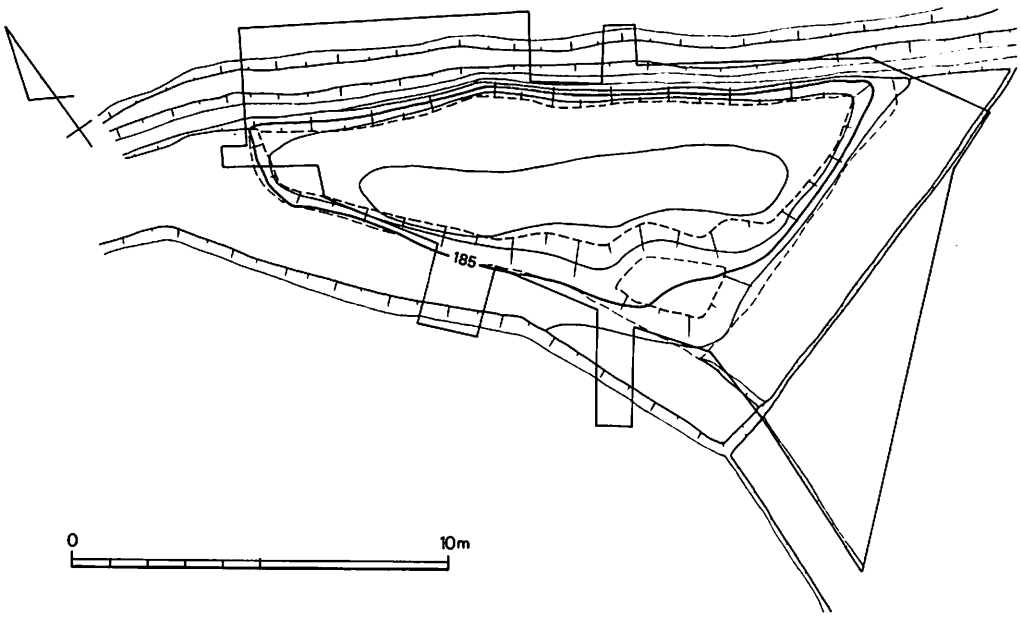
粘質土礫層上に混褐色土礫を盛って築成されている。内部主体は何ら検出できていない。積石塚からは何ら遺物は出土していないが，この積石塚の西方の小礫塊中より土師質土器片７点，瓦質土器片３点，須恵器・須恵質土器片２点，陶器片１点，砥石１点が出土しているが，大半は細片で，図示しえたのはわずかに４点のみである(第13・14図，図版４ｂ)。

１は須恵器口縁部片で，復元口径6.8cmをはかる。内・外面とも回転ナデを施す。２は土師質土器片で，内面粗い刷毛目調整，外面上半は斜位刷毛目，下半は縦位刷毛目ののち横位刷毛目を施す。３は瓦質土器片で，内面横ナデ，外面は格子目叩きを施している。第14図は砥石で，長さ15.6cm，幅8.4cm，厚さ5.4cmをはかる。４面とも砥石として使用しており，下端部に自然面を大きく残し，上端部は折損している。表面には右上→左下，あるいは左上→右下方向への擦痕がみられる。石材は不明だが，黄褐色を呈している。

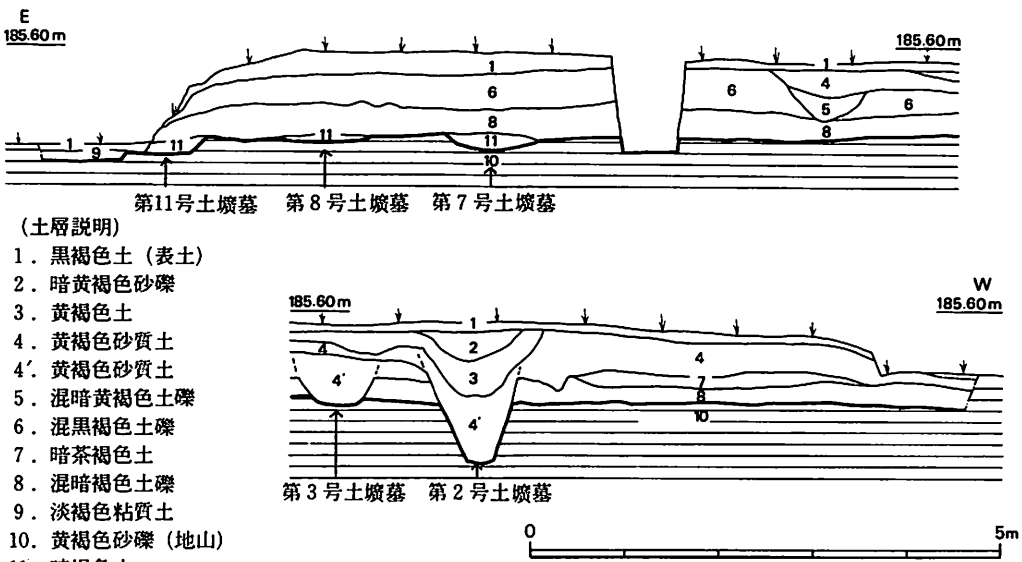
４　糸井第６号古墓

現状と規模（第15図，図版５ａ）　第６号古墓は古墓群の北東端にあり，第４号古墓の北東約180ｍの位置にある。行政上は三次市糸井町86に所在する。現状は，南辺・西辺を私道で削平され，北辺墳裾・東辺墳裾まで水田がせまっている。平面三角形で，現存規模はほぼ東西17.5

m×南北7m，高さは北辺水路底面及び東辺水田面より約1m，南辺私道面より0.5mをはかる，比較的低平な墳丘である。墳頂部は最高所（標高185.55m）がやや南に寄っているがほぼ墳丘中央にあり，ほぼ平坦である。調査前には，この墳頂部には墳丘南半に偏って墓石22基が東西に並んでおり，また東辺中央には正面を東方に向けて文化5年（1808年）銘の供養塔1基が置



第15図　糸井第6号古墓地形測量図（1：200）



（土層説明）
1．黒褐色土（表土）
2．暗黄褐色砂礫
3．黄褐色土
4．黄褐色砂質土
4′．黄褐色砂質土
5．混暗黄褐色土礫
6．混黒褐色土礫
7．暗茶褐色土
8．混暗褐色土礫
9．淡褐色粘質土
10．黄褐色砂礫（地山）
11．暗褐色土

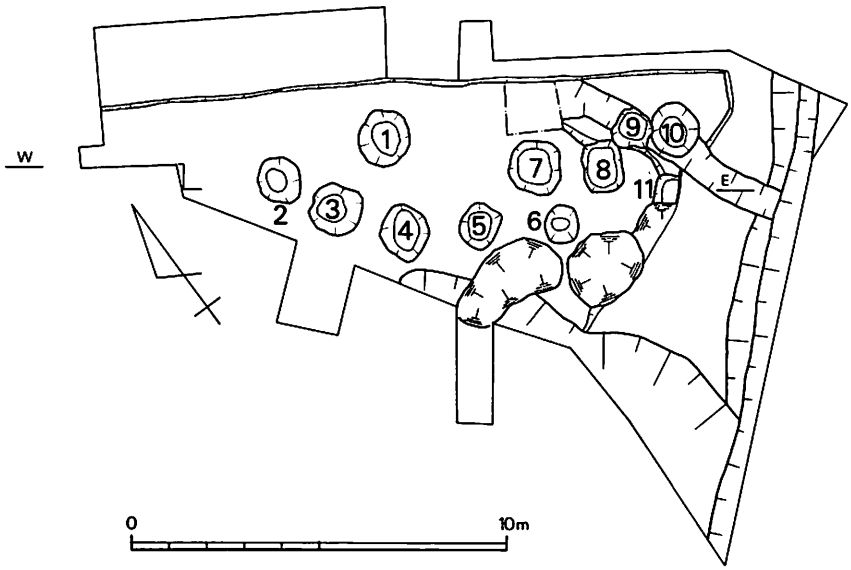
第16図　糸井第6号古墓断面図（1：80）

かれていた。22基の墓石の多くは無銘で30～50cm程度の角礫をおいただけの簡単なものであったが，１基のみ寛政５年（1793年）銘をもつものが存在した。調査の結果では，これらの墓石はその下位に墓壙を伴わず，何処からか移転されたものではないかと考えられる。

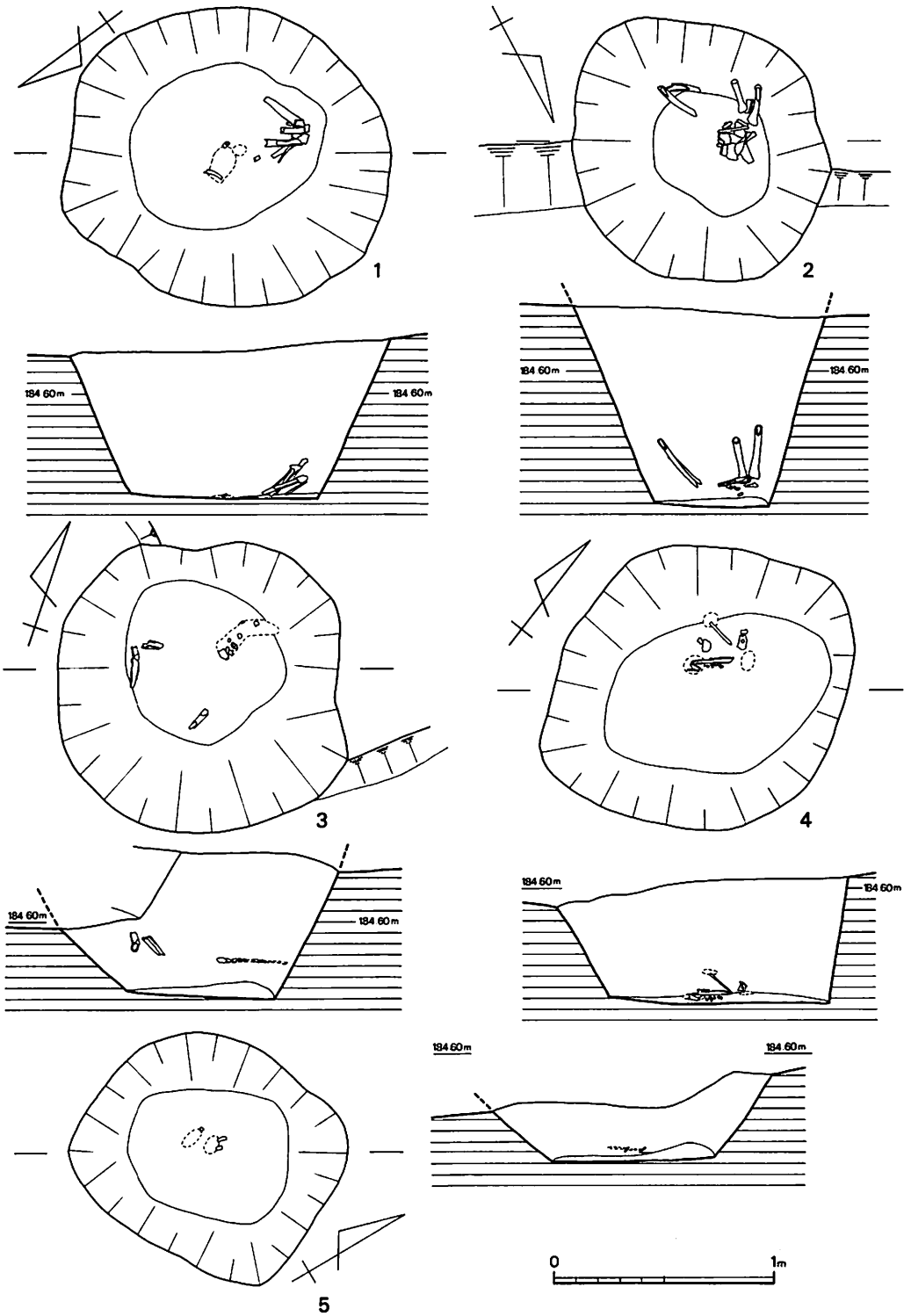
墳丘の基本層序（第16図）　基本的には上位から，表土（黒褐色土層），黄褐色砂質土層ないし混黒褐色土礫層，混暗褐色土礫層，そして地山（黄褐色砂礫層）に到る。本古墓は第４号古墓などと違い，積石塚と呼ぶべきものとは様相を異にする。本来，黄褐色砂質土層及び混黒褐色土礫層の上面が本古墓の墳頂であるが，この墳頂には数ヶ所に10cm大の角礫が径１ｍ程度に集まった集石の形で存在し，陶磁器片数点が散在的に出土しているものの，各集石には土壙などを一切伴っていなかった。

土壙墓（第17～19図，図版５ｂ・６・７）　墳丘下で計11基の土壙墓を検出した。11基のうち９基は地山面から掘りこまれており，残りの２基（第２号土壙墓・第３号土壙墓）はより上層（恐らく黄褐色砂質土層上面）から掘りこまれている。この掘りこみ面の違いは，埋積土の土質・土色の差違によっても区別できる。すなわち，前者は大半が暗褐色土（第９号土壙墓は淡褐色土）であるのに対し，後者は黄褐色土であった。　11基の土壙墓はほぼ墳丘の範囲におさまっており，いずれも土壙墓間の距離は0.4～1.2ｍと近接していながらも，切り合っているものは少ない。第８～10号土壙墓が僅かに切りあっており，少なくとも第10号土壙墓は第９号土壙墓に先行することは判明している。さらに，土壙墓の配列も，墳丘の範囲の南半に比較的偏っているが，整然としており，それ程長期間にわたって造営された墓地でないことを示している。

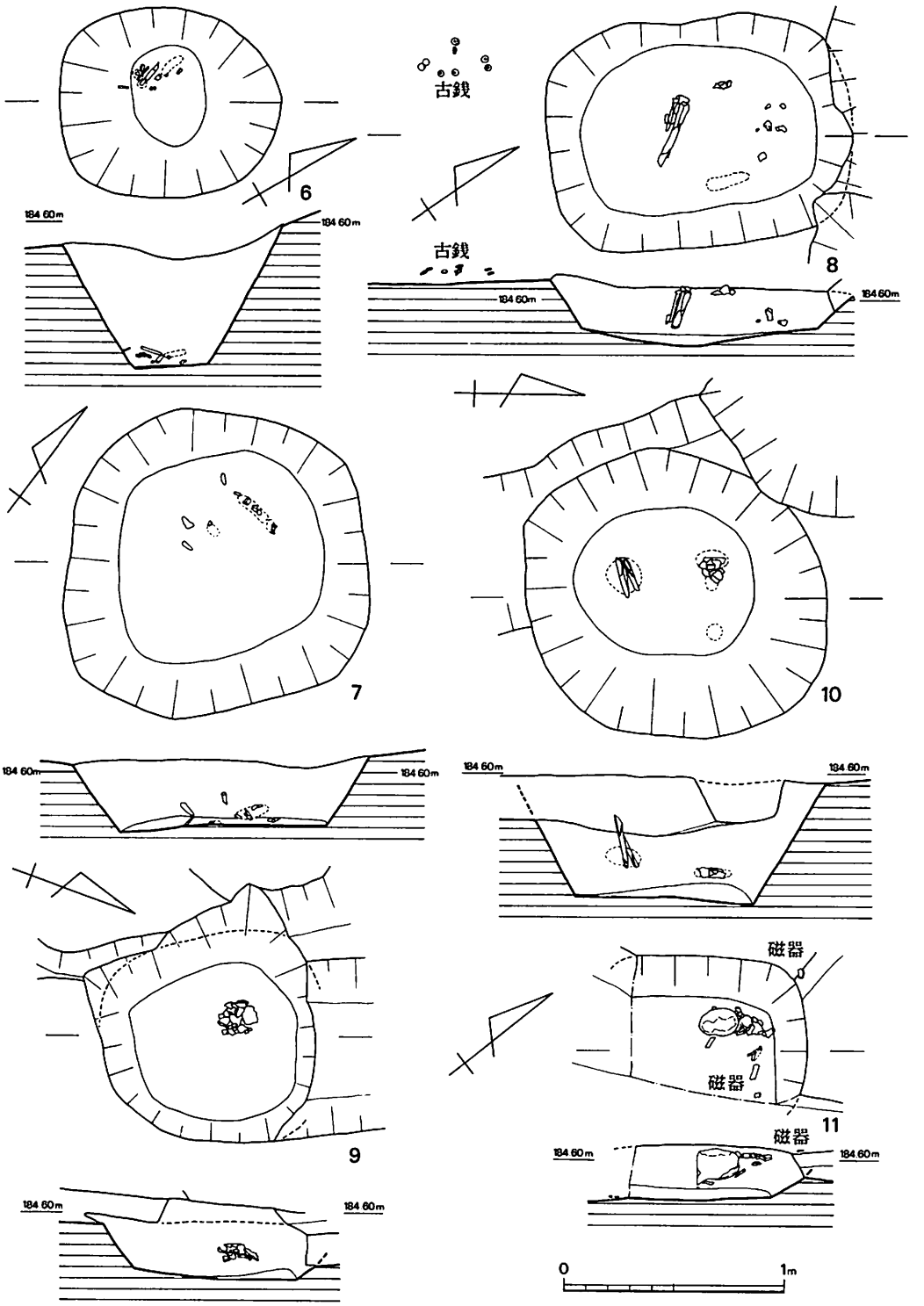
（１）土壙墓の形状と規模　先ず，平面形は隅丸方形（第２，３，４，７，９号土壙墓），隅丸長方形（第５，８号土壙墓），長円形（第１，６号土壙墓），円形（第10号土壙墓），不明（第



第17図　糸井第６号古墓土壙墓配置図（１：200）



第18図　糸井第6号古墓土壙墓実測図（1）（1：30）



第19図　糸井第6号古墓土壙墓実測図（2）（1：30）

11号土壙墓）となるが，大半は隅丸方形，円形で，明確な隅丸長方形と呼べるものは第８号土壙墓のみである。次に，断面形についてはいずれも逆台形と呼べるものだが，底辺の広さ及び深さにより大きく三種類に分けることができる。①底面が広く，浅いもの（底径59～107cm，深さ25～47.5cm），――第５，７～９，11号土壙墓，②底面が広く，比較的深いもの（底径67～109cm，深さ54～72cm）――第１，３，４，10号土壙墓，③底面が狭く，深いもの（底径33～60cm，深さ65～81.5cm）――第２，６号土壙墓。

規模は，先ず平面規模は上端で径ないし一辺が100～154cm，底面で同じく33～109cmである。深さは25～81.5cmである。

（２）人骨の出土状況と頭位・葬位　11基の土壙墓にはすべて人骨片が遺存していた。解剖学的な検討を経ていないが，遺存例の大半は大腿骨及び頭骨でその他の部位の遺存は稀少である。大腿骨と思われるのは，第１，２，８，10号土壙墓で出土しており，いずれも立った状態で出土しており，埋葬時に足を折り曲げた状態であったことが判る。また，第９，11号土壙墓では比較的良好な状態で頭骨が出土しており，その他第１，４，６号土壙墓では歯が検出されている。第９号土壙墓で出土した頭骨は潰れた状態であるが，北東側に向いて左側頭部を上にして出土した。第11号土壙墓ではほぼ完全に頭骨が出土し，下顎骨は天地逆転していたが，上顎骨

糸井第６号古墓土壙墓一覧表

土壙墓No	平面形	断面形*	平面規模（m）		深さ（m）	推定頭位	出土遺物・備考
			上面	底面			
1	不整長円形	②	1.37×1.51	0.72×0.93	0.72	北	鉄釘42本。40×50cmの箱式の木棺か。
2	隅丸方形	③	(1.15)×(1.17)	0.53×0.60	0.815	北	鉄釘38本。
3	隅丸方形	②	(1.38)×(1.415)	0.72×0.74	0.65	北	鉄釘27本。
4	隅丸方形	②	1.31×1.54	0.71×1.09	0.565	北	鉄釘24本。
5	隅丸長方形	①	1.00×1.13	0.59×0.73	0.405	－	鉄釘19本。
6	長円形	③	0.87×1.00	0.33×0.46	0.65	西	鉄釘28本。
7	隅丸方形	①	1.37×1.38	0.91×0.93	0.475	西	鉄釘11本。
8	隅丸長方形	①	1.05×1.375	0.77×1.07	0.30	北	鉄釘９本。土師質土器片１。
9	隅丸方形	①	(0.97)×(0.97)	0.72×0.74	0.27	－	鉄釘18本。磁器１点。
10	円形	②	1.29×1.49	0.67×0.81	0.54	北	金具状鉄製品６点。
11	――	①	(0.63)×(0.80)	(0.45)×(0.65)	0.25	－	鉄釘２本。磁器２点。

*①～③は，本文中の①～③類を示す（17ページ）

以上は直立した状態で顔を南西方向に向けていた。

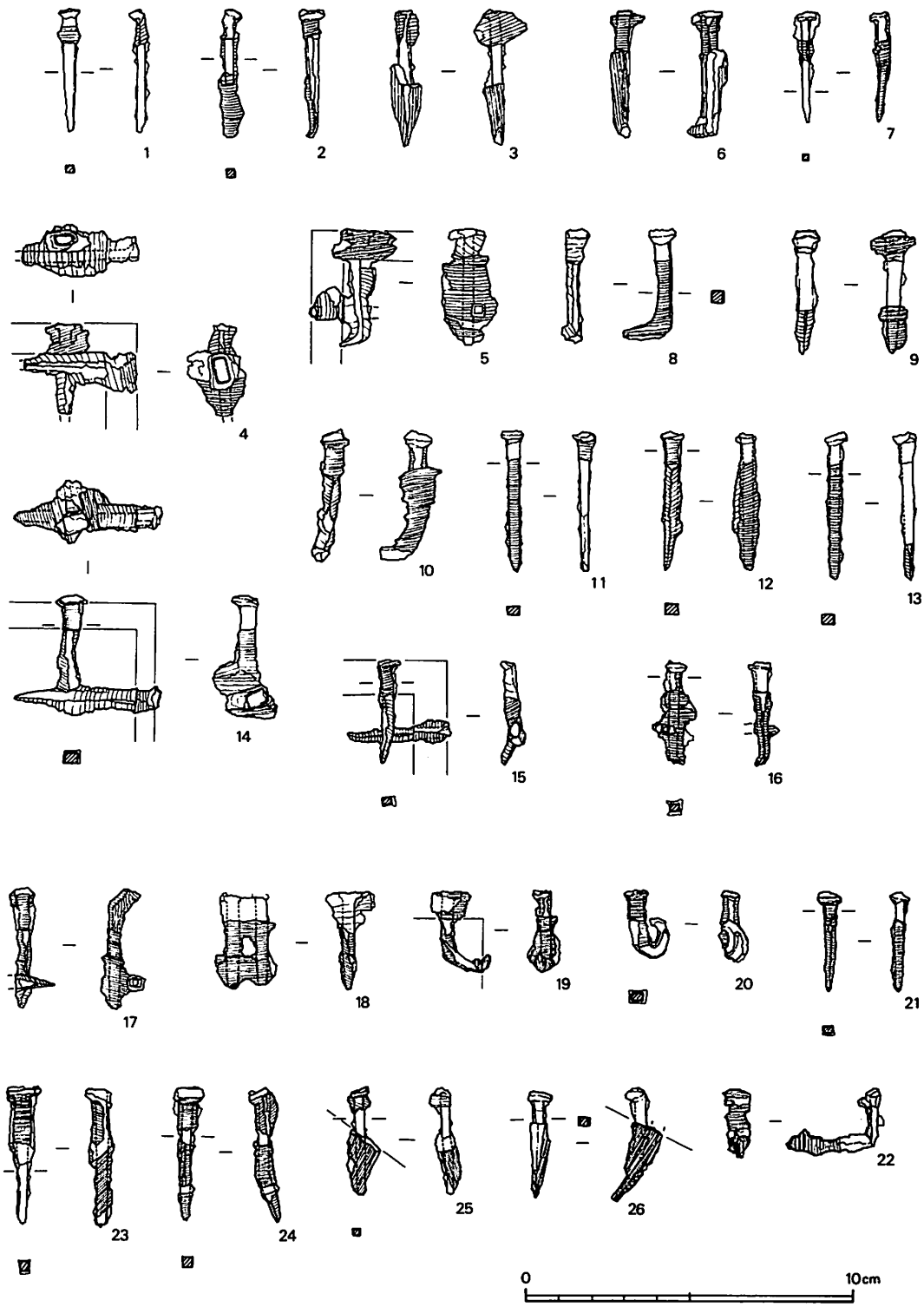
次に，頭位については，北位と思われるもの6例，西位と思われるもの2例，不明3例である。葬位については，解剖学的検討を経ていない現状では明確にはしがたいが，大腿骨を折り曲げた状態の座位屈葬の存在が考えられるが，その他は明らかでない。

（3）鉄釘の出土状況からみた棺構造の復元　11基の土壙墓の人骨はいずれも木棺に納められていたことは，後述のようにいずれの土壙墓からも木質の付着した鉄釘・金具状鉄製品が多く出土していることで明らかである。ただ，その木棺がどのような形態のものであったかについては，明らかにすることは困難である。ただ，第1号土壙墓において試みたことろによれば，計42本の鉄釘はほぼ4ヶ所に集中して出土しており，各鉄釘集中部分の範囲は径10～20cmである。勿論，土砂の落ちこみによる鉄釘の移動は充分考えなければならないが，少くとも第1号土壙墓に納められた棺は，主としてその四隅に鉄釘を打ちこんで作られた木棺であることが判る。鉄釘の出土状況からすれば，第1号土壙墓の木棺はほぼ北－南に主軸をもつ50cm×40cmのやや長方形気味の箱式の木棺であったと考えることができよう。さらに，第20図4，5，14，15のような，直角に交錯して打ちこまれた鉄釘が，この第1号土壙墓の四隅からも出土していることから，この類の鉄釘が出土している土壙墓（第1～3号土壙墓）はいずれも方形の木棺を納めていた可能性が高いといえるだろう。なお，一般的な鉄釘をまったく出土せず，金具状鉄製品のみを出土した第10号土壙墓の棺構造については注目されるが，現状では明らかにしえない。

遺物　土壙墓内及び土壙墓周辺など土壙墓に直接伴う遺物として，人骨片11体分，鉄釘218本，金具状鉄製品6点，陶磁器片6点，古銭11～12枚（寛永通宝銅銭7枚，鉄銭4～5枚）が出土している。

1．鉄釘（第20図，図版8）　すべての土壙墓から計218本出土している（完形のみの数量）。いずれの鉄釘も，釘身に2種類以上の異なった木目の木質が顕著に付着しており，鉄釘が打ちこまれていた棺材の厚さ，さらには棺構造まで一定度の把握が可能である。

鉄釘の長さは2.3～4.9cmで3.1～4.2cmのものがやや顕著に認められる。釘頭は端部をL字形に折り曲げた折頭形のものが大半で，釘頭の平面形は長方形のものが主体である。釘身の断面形はほぼ正方形で，折損例の断面観察による限りでは，いずれも中空で17の例のように木芯をもつものも存在する。釘身に付着する木質については，釘頭のつけ根あたりの木質と釘身下半の木質の木目の走向方向が直交する例が多く，これは明らかに少くとも2枚の板材（あるいは角材）を緊結していることを示す。さらに，内板に関しては不明だが，外板に関しては鉄釘に付着している木質の幅から厚さ6～12mm程度のうすい板材を用いていると考えられる。また，大半の木質は木目が釘身に対して直交して（つまり横走する）おり，このことは鉄釘の大半は柾目の板材の平面を打ち貫いているのに対し，3，6，25，26などのように釘身下半の木質が釘身に対して並行して（つまり縦走して）木目が走っている例は，板材の小口部分に打たれた釘であることを示唆している。また，2本の鉄釘が直交して打ちこまれている例がいくらかあ



第20図　糸井第６号古墓出土鉄器実測図（１）（１：２）

る（4，5，14～17）。これらは，方形の木棺の四隅に打ちこまれていたものと考えられる。

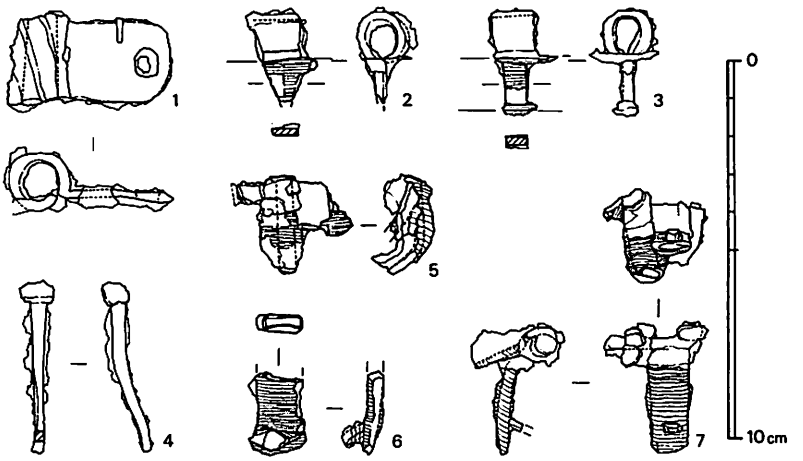
2．金具状鉄製品（第21図，図版8）　いずれも第10号土壙墓内で出土したものである。

1は厚さ2～4㎜，幅2.2㎝の鉄板の端部を折り曲げて径1.6㎝の管状につくり，もう一方の端部中央に径7㎜の孔を穿つ。長さ4.3㎝。2・3とも同工の金具で，厚さ2～4㎜，幅6～12㎜の細長い鉄板の端部をやはり径13～14㎜の管状に折り曲げ，もう一方の端部をやや幅狭にし，この部分に木質が付着している。2は下端部を欠失しているが，3は下端部をツブシ気味にして板材の固定をはかっている。3は，残存している木質から考えて，厚さ14㎜の板材の緊結具として用いられたものと思われる。4は，断面方形，折頭形の釘頭をもつ鉄釘で，下半が折れ曲っている。長さ4.6㎝。5～7はいずれも厚さ2㎜，幅10㎜程度の中空の板状鉄製品と長さ2～2.5㎝程度の短かめの鉄釘を組みあわせたものだが，銹化が著しく，その取りつけ部位等不明である。板状鉄製品の下半を中心に横走する木質が付着している。

これら金具状鉄製品もやはり棺材を固定するための緊結具の一種ではあろうが，これら金具状鉄製品が木棺のいずれの部位に，どのようにとりつけられていたのか，そしてどのような構造の木棺にとりつけられていたのかは，今後の類例の増加を待ちたい。

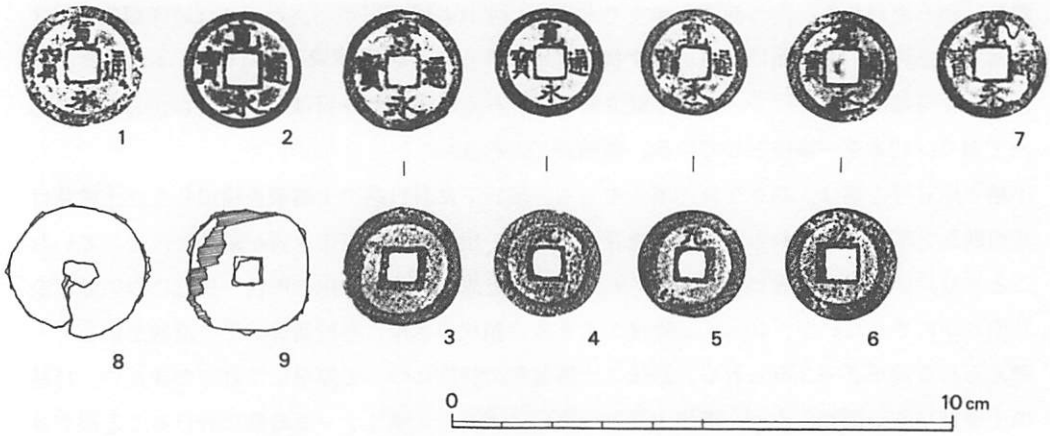
3．古銭（第22図，図版8）　寛永通宝（銅銭）7枚，鉄銭4～5枚が出土している。

寛永通宝は，径の大小・面の字体の違いにより大きく4類に分類できる。1・2は径2.35㎝，



第21図　糸井第6号古墓出土鉄器実測図（2）（1：2）

穿の一辺6㎜，字体は同一で，背銘はない。3は径2.35㎝だが，1・2と面の字体が違う。背銘はない。4・5は，径2.1㎝，穿の一辺6㎜，字体は同一で，7枚の中で最も銘は小さい。背の上部に「元」銘[1]あり。6・7は径が多少違うが，面の字体が酷似しており，4・5にくらべやや大ぶりな字体である。6は径2.15㎝，穿の一辺6.5㎜，背上に「元」銘がみられる。なお，背の郭が左にずれている。7は径2.1㎝，穿の一辺6㎜，背銘はない。



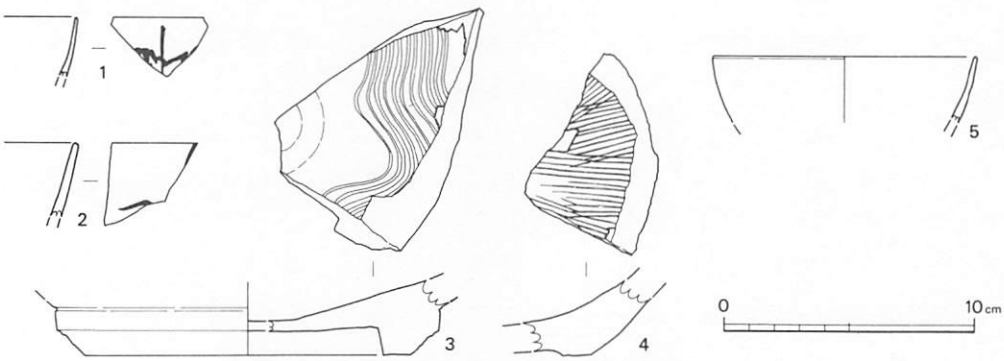
第22図　糸井第６号古墓出土古銭拓影・実測図（２：３）　１～７：銅銭　８・９：鉄銭

８・９は鉄銭である。銹化のため，銘の有無は不明である。８は径2.6～2.7cmのやや楕円形である。９は一辺2.35cmの隅丸方形である。[2]

これらの古銭は，例えば９のようにその表面に木質が付着していたり，あるいは板片に銅銭が付着していた例もあり，本来これらの古銭が何らかの板箱状の容器に納められていた可能性がつよい。銅銭・鉄銭をあわせて11～12枚あり，２つの土壙墓に副えられた六道銭と考えることができる。ということになれば，出土位置から距離的に最も近い第６号土壙墓及び第８号土壙墓がその対象と考えることができよう。

４．土器（第23図，図版８）　１・２・５は土壙墓に伴う磁器であり，３・４は黄褐色砂質土層上面より出土した陶器である。

１は第３号土壙墓と第４号土壙墓の中間の地山直上で出土した磁器である。白色の素地に青色・草色の草花文様の染付を行なっている。２は第９号土壙墓直上から出土した磁器で，白色の素地に淡青色・暗緑色の染付を行なっている。５は，第11号土壙墓近辺で出土した白色の磁



第23図　糸井第６号古墓出土土器実測図（１：３）

器で，碗と思われる。内外面とも無文である。いずれも伊万里焼である。3は暗赤褐色を呈す陶器の底部片で，内底面に11条の波文状の沈線がみられる。唐津焼とみられる。4は，淡赤褐色を呈する擂鉢の底部片で，内面に縦位刻み目がみられる。刻み目は下→上にむかって入れられており，12本を一単位としている。備前焼であろう。

小結　第6号古墓は，高さ1mの墳丘をもち，墳丘下に計11基の土壙墓を検出した。土壙墓は平面隅丸方形で，いずれも人骨片が遺存していた。出土した鉄釘に木質が顕著に付着していたことより，いずれも人骨は木棺に納められていたと思われる。木棺の形状・構造については余り明らかにできないが，40×50cm程度の大きさの箱状の木棺に座位屈葬の形で遺骸を納めたと考えられる例が2～3みられる。最後に土壙墓群の時期について簡単にふれておきたい。11基の土壙墓はその掘りこみ面，埋積土などの違いにより，大きく2～3時期に分けることができる。先ず，地山面より掘りこまれた第1，4～11号土壙墓が古く，これらの上に70～80cmの厚さで盛土されたのち，黄褐色砂質土層上面から掘りこまれた可能性のつよい第2，3号土壙墓がより後出的である。ただ，前者も墳丘の範囲に納まっており，また前者と後者の間に配列に特に乱れがないことなどより，11基の土壙墓は余り時間を経ずして掘られたと考えられる。そして，その時期については寛永通宝が出土していることなどより，江戸時代中期以降と捉えておきたい。

（註）

(1)　「元」の背銘は，寛保元（1741）年に大坂で鋳造された寛永通宝にしかみられない。

(2)　隅丸方形の鉄銭としては，東広島市西条町鏡東谷遺跡ＳＫ04から出土した「仙台通宝」（一辺2.1cm）がある。この「仙台通宝」は仙台藩が天明4（1784）年に鋳造したものである。
広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』昭和58（1983）年

V. まとめ

本調査は，三次市糸井町に所在する糸井古墓群（計6基）の第3～6号古墓を対象としたものである。第3号古墓・第5号古墓については，いずれも後世の削平が著しく，旧状を明らかにすることはできなかった。第4号古墓は，南隅に突出部をもつ平面隅丸長方形の積石塚で，墳頂下約90cmで埋葬施設と想定される土塁状積石部を検出した。この土塁状積石部の中央凹部には方形あるいは長方形の埋葬主体を納めたと思われる空間が3ヶ所存在した。この第3号古墓は，その出土遺物からごくおおまかに中世末～近世の所産と考えておきたい。

第6号古墓では高さ1mの低平な墳丘下で計11基の近世土壙墓を検出した。平面形態は隅丸方形・円形のものが主体で，その規模は上面で1.31～1.37×1.38～1.54m，底面で0.53～0.91×0.6～1.09m，深さ0.27～0.815mをはかり，底面が広く比較的深い逆台形の断面形を示す。

処で，広島県内で比較的まとまって検出された近世土壙墓群としては，三次市大久保C地点遺跡[1]（15基），府中市寺山遺跡[2]（6基），豊田郡本郷町陣べら遺跡群[3]（12基），東広島市西条町鏡西谷遺跡H地区[4]（7基），同鏡東谷遺跡[5]（10基），佐伯郡吉和村妙音寺原遺跡[6]（14基），などがあり，これらの遺跡で検出された土壙墓をその平面規模・深さ・平面形態によって分類すると，おおまかに3つに分類することができよう。すなわち，A類；径・一辺が0.5～1m，深さ0.4～1.1m，平面形隅丸方形・円形の筒状に深い土壙，B類；平面規模はA類にくらべ大きく，径・一辺が0.8～1.4m，深さ0.3～0.8mをはかる。底面が広く，比較的深い逆台形を呈する土壙，C類；平面隅丸長方形・楕円形を呈する土壙。A類の土壙が主体となるのは，陣べら遺跡群・鏡西谷遺跡H地区・寺山遺跡，B類が主体となるのは糸井第6号古墓，C類が多いのは妙音寺原遺跡・鏡東谷遺跡で，大久保C地点遺跡はA類とC類が混在する。A～C類の土壙墓の先後関係については，いずれの土壙墓も出土遺物が少なく余り明確にできないが，先ずA類については，陣べら遺跡群のP9・P10土壙内より「嘉永2（1849）年」「安政3（1856）年」銘の墓石が出土しており，江戸末期と考えられる。B類については，糸井第6号古墓の土壙墓群に伴って寛永通宝・鉄銭が出土しているのみで，明確な時期を示す根拠に乏しい。ただ，同じB類の近世土壙墓6基を検出している福島県須賀川市大字下小山田字早稲田所在の早稲田古墳群で検出された近世墓の例[7]では，6基のうち5基が「新寛永」（1668年以降鋳造された寛永通宝）を，さらに1基は鉄銭の寛永通宝（1739年以降鋳造）を出土していることから考えて，B類の土壙墓の年代を江戸時代中期に考えることができよう。C類は，鏡東谷遺跡のSK04で1784年鋳造の仙台通宝（鉄銭）が出土していることより，江戸時代後半まで引き続き存在するようだが，むしろ中世的な形態を残していると考えられ[8]，一般的にはA・B類に先行する可能性がつよい。

次に，糸井第6号古墓土壙墓群から出土した鉄釘218点（完形のみ）を長さ別に出現頻度を調べると，最小2.3cm，最大4.9cmとなり，ピークは3.1cm（13点），3.7cm（13点）で，3.1～4.3cm

が全体の半数以上を占める。この数値を県内の他遺跡出土の鉄釘の数値と比較すると，先ず東広島市鏡千人塚遺跡[9]（ＳＫ02，03，06，11，15。ＳＫ15は15世紀後半～16世紀に時期設定されている）では，最小2.8cm，最大12.3cmでその中心は4.3～7.8cmである。また山城跡から出土する鉄釘では，６～７cm（東広島市狐ヶ城跡[10]，15世紀前半），４～６cm（三次市陣山城跡[11]，室町時代），3.4～10.6cm（三次市加井妻城跡[12]，15世紀後半～16世紀代），５～10cm（大竹市亀居城跡[13]，17世紀初頭），2.6～7.8cm（広島市国重城跡[14]，15～16世紀）となり，中世後半期の鉄釘の長さは４～10cm程度となり，これに対して糸井第６号古墓の各土壙墓から出土した鉄釘はかなり小型化していると云え，このことは同じく近世期の土壙墓群とされる三次市大久保Ｃ地点遺跡ＤＫ04出土の鉄釘の長さが４～５cmになるのに通じると考えられる。

以上，寛永通宝の出土・土壙の形態的特徴・出土鉄釘の長さの分析などから，糸井第６号古墓の土壙墓群は，江戸時代中期以降の比較的短期間に造られたと考えることができよう。

（註）

(1) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』 昭和54(1979)年

(2) 寺山遺跡発掘調査団『寺山遺跡発掘調査報告』 昭和54（1979）年

(3) 陣べら遺跡群発掘調査団『陣べら遺跡群発掘調査概報』 昭和46（1971）年

(4) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』 昭和58（1983）年

(5) (4)に同じ

(6) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告(4)』 昭和58（1983）年

(7) 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅸ 早稲田古墳群』 昭和57（1982）年

(8) (1)に同じ

(9) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告』 昭和57（1982）年

(10) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』 昭和58（1983）年

(11) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 昭和53(1978)年

(12) (1)に同じ

(13) 大竹市教育委員会『芸州亀居城跡――第１・２次発掘調査報告――』 昭和55（1980）年

(14) 広島市教育委員会『国重城跡発掘調査報告』 昭和57（1982）年

図版１

ａ．糸井第４号古墓全景（調査前，南東より）

ｂ．糸井第４号古墓積石部（南東より）

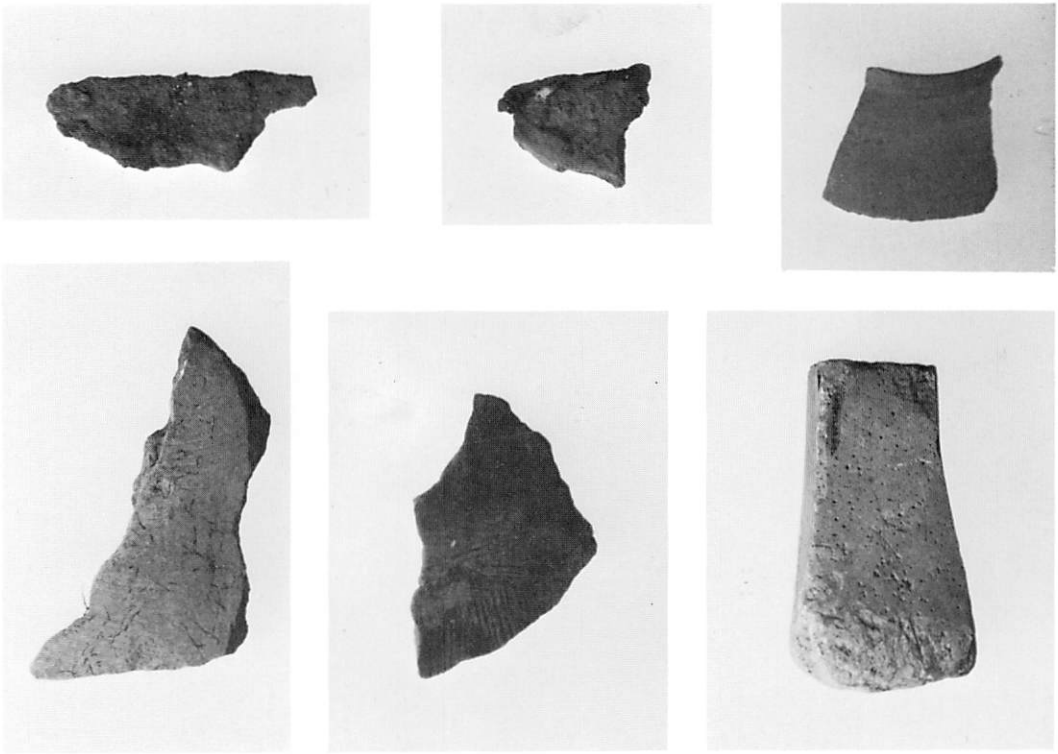
a．糸井第 4 号古墓積石部・南西辺墳裾列石（南西より）

b．糸井第 4 号古墓北西—南東断面（北東より）

a．糸井第 4 号古墓土墨状積石部（北西より）

b．糸井第 4 号古墓土墨状積石部中央凹部全景（南西より）

a．糸井第 5 号古墓全景（調査前，北西より）



b．糸井第 4 号古墓・第 5 号古墓出土遺物

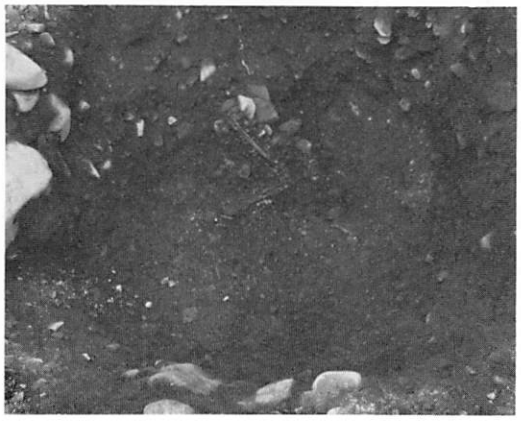
a．糸井第 6 号古墓全景（調査前，東より）

b．糸井第 6 号古墓土壙墓群全景（西より）

第 1 号土壙墓

第 2 号土壙墓

第 3 号土壙墓

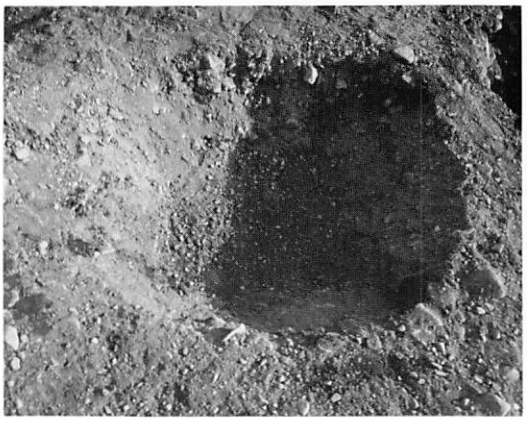


第 4 号土壙墓

第 5 号土壙墓

第 6 号土壙墓

糸井第 6 号古墓土壙墓（1）



第 7 号土壙墓

第 8 号土壙墓

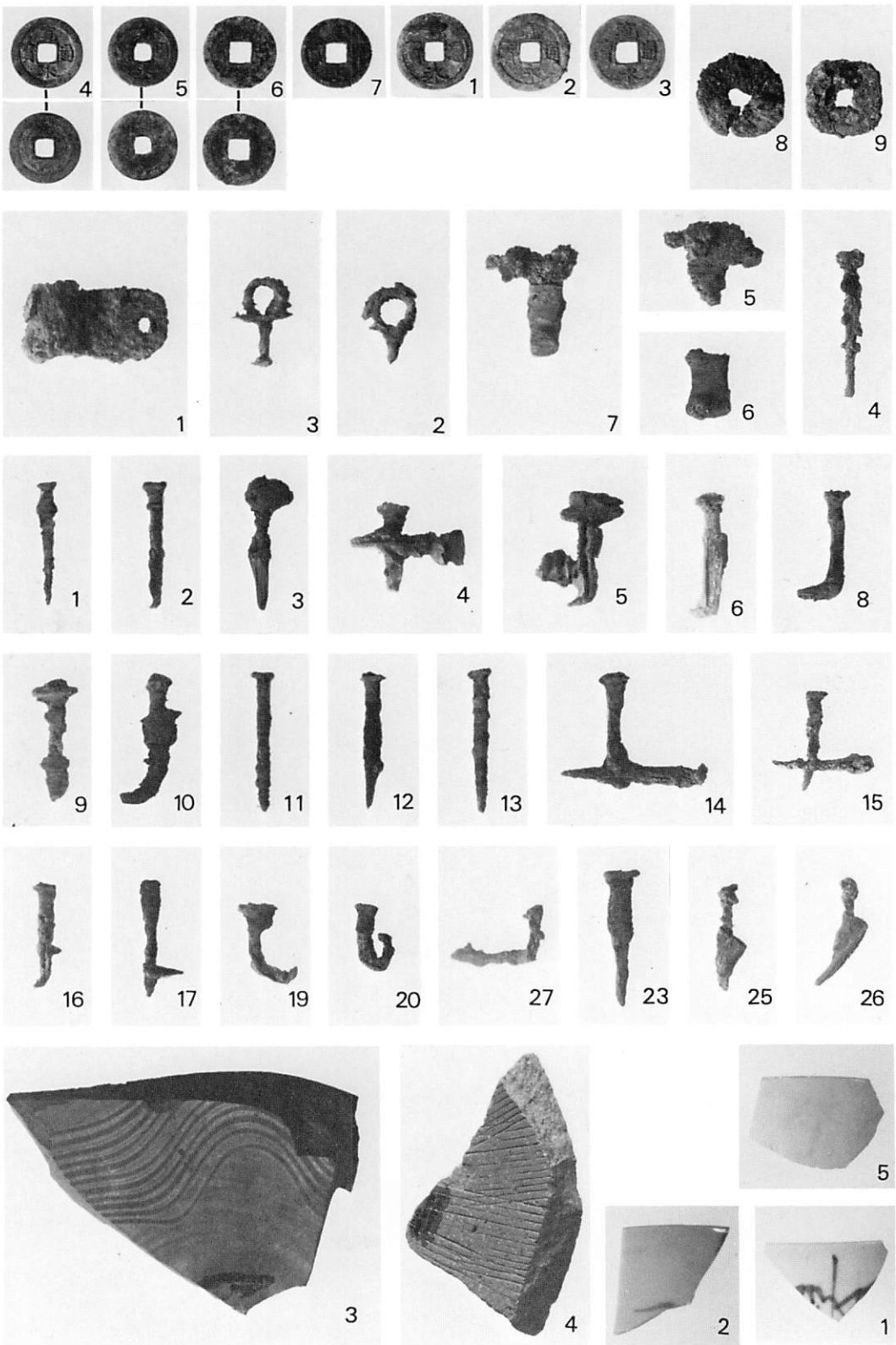
第 9 号土壙墓

同　　左

第10号土壙墓

第11号土壙墓

糸井第 6 号古墓土壙墓（2）



糸井第 6 号古墓出土遺物

糸井古墓群発掘調査報告
—県営圃場整備事業糸井地区に係る
埋蔵文化財の発掘調査—

昭和59年 3 月

編集
発行　(財)広島県埋蔵文化財調査センター

印刷　至誠堂印刷株式会社